国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞ソトから見た日本語の特質と普遍性：言語の普遍性と多様性：自動詞・他動詞の対応にみられる普遍的傾向

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: パルデシ, プラシャント メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000952

講演

〈ソトから見た日本語の特質と普遍性〉
言語の普遍性と多様性
～自動詞・他動詞の対応にみられる普遍的傾向～

言語対照研究系教授　プラシャント・パルデシ

はじめに

今日は、インドで数千人のマニアが学習している日本語の東京方言でお話します。発音のおかしいところがありましたらご容赦ください。

窪薗先生から名字の説明がありましたが、私の名字もインドで非常に珍しく、パルデシは姓、プラシャントは名です。パルデシとは、外国人という意味ですので、インドで「パルデシさん」というと「外国人さん」となるので、みんなにプラシャントと呼んでとお願いしています。プラシャントは「太平」、静かな人という意味ですが、私は静かではありません。

窪薗先生から促音の話がありました。私の母語であるマラーティー語には促音があります。隣のヒンディー語と同じです。また、木部先生から、「私たち」という単語が、相手を含むか含まないかという話がありましたが、マラーティー語でも別々の二つの語彙を用意しています。しかし、隣のヒンディー語は、古代インドのサンスクリット語から生まれた姉妹言語ですが、その区別はありません。南インドのドラヴィダ系の言語には区別があります。

今日は、まず言語現象について詳細に説明し、そのあと、なぜ当該現象はそうなっているかを説明します。私のやっている研究は、言語の普遍性と多様性を記述・説明することですので、なるべく多くの言語で、同じ現象を、同じ方法論で調べ、そこにどんな類似点があるか、どんな違いがあるかをお話し、そのあと、それを地図上に表示していきます。ヒンディー語の「私たち」には、相手を含むか含まないかという違いはありませんが、その隣にあるマラーティー語にその区別があります。マラーティー語の隣にあるドラヴィダ系の言語にも同



プラシャント・パルデシ（Prashant PARDESHI）

言語対照研究系教授。インド・プネー市生まれ。博士（学術）（神戸大学）。インドで日本語教師をしていた時、学生からの質問にうまく答えることができず、言語の仕組みを客観的に分析・理解する必要性を感じ、日本への留学を決意し、言語学の世界に足を踏み入れました。母語のマラーティー語と日本語の対照研究から始まった研究は、その後興味の対象が拡大するにつれいつの間にかアジア諸語の対照研究に発展していきました。言語そのものおよび言語と文化のより深い理解を目指して、さまざまな言語を学ぶことにも力を入れています。専門は言語類型論、対照言語学。主な著書は『自動詞・他動詞の対照（シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉第四巻）』（共著：西光義弘、くろしお出版、2010年）、『言語のタイポロジー認知類型論のアプローチ（講座：認知言語学のフロンティア　第五巻）（講座：認知言語学のフロンティア）』（共著：堀江薫、研究社、2009年）など。

様の区別があります。地図上でこの分布を描くことによってドラヴィダ系の言語からマラーティー語にこの現象が借用された可能性を可視化することができます。今日の話のキーワードは「地図」です。

まず、日本語の自他動詞の形がどうなっているか、長さはどうか。長さと複雑さは同じ意味で使っているので、発音の長さでいきます。そのあと世界の言語を同じ手法で自他動詞の形・長さ・複雑さを調べて日本語と比べた場合、どんな類似点を観察でき、どんな違いを発見できるのかという話をします。次に、なぜそのような違いがでてくるのか、類似点があるのかを説明します。そして最後に、日本語の多義的自他動詞について、われわれ学習者はどう学ぶかについて考えたいと思います。

第一部　日本語の自他動詞の形・長さ・複雑さ

日本語を母語とする人にはまったく問題ないわけですが、「ドアが開いた」「ドアを開けた」で、自動詞は「開いた」、他動詞は「開けた」です。「バットが折れた」「バットを折った」。「折れる」と「折る」、「開く」と「開ける」、自動詞と他動詞は形のうえで違っています。でも、英語では、自動詞も他動詞も「open」「break」です。日本語と英語だけを比べると、極端に違いが見えます。二つの言語どれを見ても違うのは当たり前です。しかし、その表面的な違いを見るのではなく、もっとたくさんの言語を調べていくと、いろいろな言語はグループごとに分けることができ、そのグループ間に連続性があるようなことが見えてきたりします。

まず、一つめの謎を考えます。日本語の自他動詞の形です。図1で、自動詞と他動詞を示していますが、ローマ字表記をすると、他動詞の「乾かす（kawak-as-u）」のほうが自動詞の「乾く（kawak-u）」より長く、「凍る（koor-u）」「凍らす（koor-as-u）」も他動詞のほうが長くなっています。逆のパターンもあります。「壊す（kow-as-u）」は短く、「壊れる（kow-are-ru）」が長く、「裂・割く（sak-u）」は短く、「裂・割ける（sak-e-ru）」は長い。どのような場合に、自動詞のほうが短く、他動詞のほうが長くなるのでしょうか。逆に、どんな場合は、他動詞のほうが短く、自動詞のほうが長くなるのでしょうか。

◆日本語の自他動詞の形・長さ・複雑さ：非対称性

自動詞		他動詞
乾く kawak-u	＜	乾かす kawak-as-u
凍る koor-u	＜	凍らす koor-as-u
→他動詞のほうが自動詞より長い・複雑		
壊れる kow-are-ru	＞	壊す kow-as-u
裂・割ける sak-e-ru	＞	裂・割く sak-u
→自動詞のほうが他動詞より長い・複雑		

図1　日本語の自他動詞の形

このようなことは、言語学的に大変関心があります。さきほど窪薗先生の話にあったように、これは偶然ですみたいなことをいうと、科学にはなりません。しかし、たくさんの言語を調べてみると、きちんとした理由が見えてきます。言語学者の作業は、そのような背後にある原理、理由を究明することです。それがわれわれの仕事ですので、たくさんの言語を比べる必要があります。さきほどの日本語の自他動詞に見られるような形・長さ・複雑さの問題を少し専門的にいうと、

「非対称性」です。自動詞と他動詞のあいだに非対称性が見られます。ある場合は他動詞のほうが長く、ある場合は他動詞のほうが短い。どうしてだろうか、というのが疑問点です。

その謎を解き明かすために、世界の言語の自他動詞を調べて、比較する試みをやっております。

第二部　世界の言語の自他動詞の形・長さ・複雑さ

前川先生から紹介があった、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）で検索をかけて動詞だけを抽出して、その動詞のなかでサ変動詞を全部捨て、和語動詞だけを残します。その和語の動詞に、対になるものがあるかどうか調べます。たとえば、「開く」「開ける」、「割く」「割ける」、「凍る」「凍らす」のように、みごとに対をなしている動詞がいっぱいでてきます。しかし、英語では自動詞も他動詞も形は同じになっているかと思います。

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）ですべて検索して日本語にどれくらいの対があるかというと、五四〇以上あります。これらの自他動詞をどのように覚えるか、使い分けるかは英語や中国語を母語とする学習者にとって大変難しい問題です。

世界のたくさんの言語を調べるためには、調べる範囲を狭めないといけないので、調査規模の大きな研究をやるときは、図2に示す三一の動詞対を定めています。この三一対を選ぶには理由があります。特に自動詞と他動詞の対がでてきやすいような動詞をあえて選んでいるわけです。同じような意味をもつ動詞対をいろいろな言語で調べ、もし違いがでてきたら、その違いはなぜでてくるのかを考えることになります。

Haspelmathは、三一の動詞対を二一言語で調べ、そのデータを分析した研究論文を一九九三年に発表しています。研究を進めるうえで、収集したデータを分類しなければならないのですが、分類の基準をどうするかが重要な課題です。図3は派生型による五分類を示しています。専門的な名前はさておき、他動詞より自動詞のほうが長い、日本語の「裂ける」「裂く」は「A」の「反使役化型」といいます。また、「開く」「開ける」は自動詞より他動詞のほうが長いものは、「使役化型」であるので「C」で表します。それ以外の三分類には方向がありません。たとえば、日本語の「開（ひら）く」「開（ひら）く」は同じ単語で、「死ぬ」「殺す」はまったく違う単語で

1. 起きる：起こす *wake up/wake up*	9. 集まる：集める	17. 繋がる：繋ぐ、繋げる *connect* (intr.)/(tr.)	25. 凍る：凍らせる *freeze* (intr.)/(tr.)
2. 折れる・割れる：折る・割る *break/break*	10. 広がる：広げる *spread* (intr.)/(tr.)	18. 沸く：沸かす *boil* (intr.)/(tr.)	26. 溶ける：溶かす *dissolve* (intr.)/(tr.)
3. 焼ける：焼く *burn/burn*	11. 沈む：沈める *sink* (intr.)/(tr.)	19. 揺れる：揺らす *rock* (intr.)/(tr.)	27. 満ちる：満たす *fill* (intr.)/(tr.)
4. 死ぬ：殺す *die/kill*	12. 変わる：変える *change* (intr.)/(tr.)	20. 消える：消す *go out/put out*	28. 直る：直す *improve* (intr.)/(tr.)
5. 開く：開ける；開く：開く *open/open*	13. 溶ける：溶かす *melt* (intr.)/(tr.)	21. 上がる：上げる *rise/raise*	29. 乾く：乾かす *dry* (intr.)/(tr.)
6. 閉じる：閉ざす；閉まる：閉める *close/close*	14. 壊れる：壊す *be destroyed/destroy*	22. 終わる：終える *finish* (intr.)/(tr.)	30. 裂ける：裂く *split* (intr.)/(tr.)
7. 始まる：始める *begin/begin*	15. なくなる：なくす *get lost/lose*	23. 回る：回す *turn* (intr.)/(tr.)	31. 止まる：止める *stop* (intr.)/(tr.)
8. 教わる：教える *learn/teach*	16. 発達する：発達させる *develop* (intr.)/(tr.)	24. 転がる：転がす *roll* (intr.)/(tr.)	

Haspelmath（1993: 97）が調査した31の動詞対

図2　世界の言語の自他動詞の調査票

す。「死ぬ」から「殺す」が派生するのか、「殺す」から「死ぬ」が派生するのか、言語形式が異なるため判断できません。

日本語でもっと面白いのは、「始まる」「始める」です。語幹「hajim-」が同じで、それに「-a-ru」「-e-ru」がついて、どちらが派生元でどちらが派生先かを決めるのは大変難しいもので、これを「E」タイプと呼んでいます。

第三部　自他動詞の形・長さ・複雑さから見えてくる言語の普遍性と多様性

実際にわれわれの共同研究プロジェクトで約六〇言語を調べ、分析し、データベースを構築しました（The World Atlas of Transitivity Pairs（WATP）、使役交替言語地図）。そのデータベースは、URL: http://watp.ninjal.ac.jpで無料公開しています。自分の家のパソコンでアクセスすることができます。データもすべてダウンロードできます。このデータベースを使うと、なにが見えてくるでしょうか。たとえば、「沸く」「沸かす」という動詞を、世界の六〇言語でどうなっているかを調べてみました。図4の円グラフにあるように、八二%の言語で日本語と同じように「沸く」が短く、「沸かす」が長くなっていることを確認できます。日本語だけではなく、周りのいろいろな言語で、同じようなパターンが見られます。しかし、日本のなかでも、逆の派生をしている言語があります。それは北秋田方言です。これについては後ほど触れます。

また、「裂く」「裂ける」、「割る」「割れる」のような動詞を調べると、日本語でも日本国内で話されている方言でも、他動詞のほうが短く、自動詞のほうが長い。このパターンは、世界のほかの言語でも見られますが、インドの言語では、みんな逆のパターンになっています。そして、類似した派生のパターンを示す言語は、ある特定の地域にかたまっていることが見えてきます。図5は、六〇言語のデータから見えてくるパターンを可視化したものです。

この三一対のデータから面白いことが見えてきます。図6の一番から一二番の動詞と、三〇番から逆に二四番の動詞を見ると、前者は自動詞のほうが短く、使役型「C」のパターンが非常に多くなっています。後者は、その逆のパターン、つまり、他動詞のほうが短いパターンが見られます。ただし、真ん中の一三番目から二三番目の動詞対では、いろいろ逆転が起こったりしています。これはプロトタイプ的な効果といいます。典型的な鳥とそうでない鳥。

派生の方向の有無	派生型	形式的な関係
方向あり	A (Anti-causative)	自動詞（有標）←他動詞（無標）自動詞＞他動詞 自動化・反使役化型（焼ける←焼く）
	C (Causative)	自動詞（無標）→他動詞（有標）自動詞＜他動詞 他動化・使役化型（開く→開ける）
方向なし	E (Equipollent)	両方が有標（共通の語幹、標識がそれぞれ異なる） 両極型（直る：直す）
	L (Labile)	同じ語根が自動詞と他動詞として使える 自他同形型（開く：開く）自動詞＝他動詞
	S (Suppletive)	異なる語根 補充型（死ぬ：殺す）自動詞≠他動詞
	O (Others)	以上のいずれにも該当しない （主に無対）

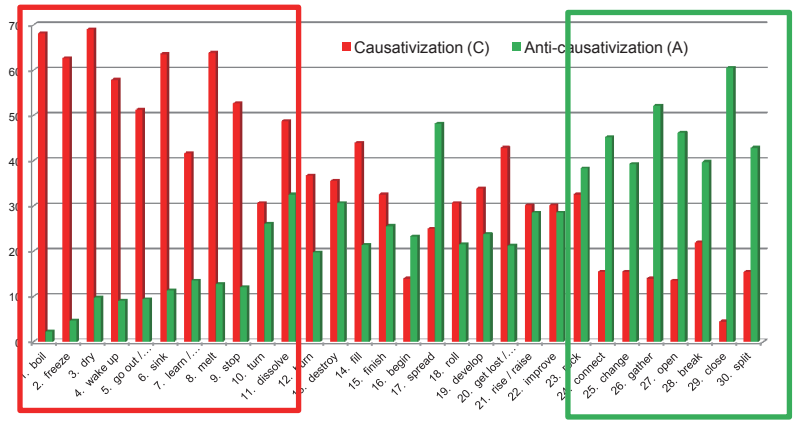
図3　世界の言語の自他動詞の形・長さ・複雑さを分類する基準



図4　個別の動詞対の派生型の選好の傾向：「沸く＜沸かす」



図5　個別の動詞対の派生型の選好の傾向：「割れる、裂ける＞割る、裂く」



自動詞＜他動詞（例：沸く＜沸かす）　　自動詞＞他動詞（例：裂ける＞裂く）

図6　プロトタイプ効果

典型的な鳥というと、日本ではスズメなどでしょうが、ペンギンやダチョウも鳥は鳥ですが、典型的な鳥ではありません。ですから、一番から一二番あたりの動詞対は典型的な使役型で二三番目あたりから三〇番目あたりの動詞対は典型的な逆使役型で、その中間のものはダチョウやペンギンみたいな非典型的なものです。世界規模で言語を見ていくと、上記のような言語間の類似点や相違点が見えてきます。

「死ぬ」「殺す」は、世界の六二%の言語で、それぞれの形式が異なる単語を用いています（図7）。殺したら罪で訴えることができますが、死んだら自然死ですので相手を訴えることはできません。重大な意味の違いがあるわけで、多くの言語は別々の単語を用意していることがこのグラフから見てとれます。

個別言語の派生型の選好

さきほどまでは、一つの動詞「沸く」「沸かす」をピックアップして、六〇言語のデータにおいて、他動詞のほうが長いパターンと自動詞のほうが長いパターンのうち、どの言語がどのパターンを示すのか、またどのパターンが優勢かを地図上の円グラフで確認しましたが、三一の動詞対を同時に全部見たい。この場合は「Chart（チャート）」というボタンを利用します。この「チャート」ボタンを押すと、図3で説明した五つのパターンのうち各言語に関して、それぞれのパターンの分布を確認することができます（図8）。図8では自動詞から他動詞を派生するパターン（赤で表示）が優勢である言語を降順で並べてあります。ネワール語、アイヌ語、モンゴル語、スィンディー語などアジア諸語が上位を占めることが見えてきます。逆に、他動詞から自動詞を派生するパターン（緑で表示）が優勢である言語を降順で並べ替えると、ルーマニア語、スウェーデン語などヨーロッパの言語が上位を占めることが見えてきます（図9）。英語のように自動詞と他動詞が同形である「L」を押してみると、バスク語、英語、北京語、タイ語が上位に浮上します。このように、自動詞と他動詞の形式的な関係のパターンを基準にデータを簡単に並べ替えることができ、それによって複数の観点から同じデータを可視化すると、視覚的に確認することができます。

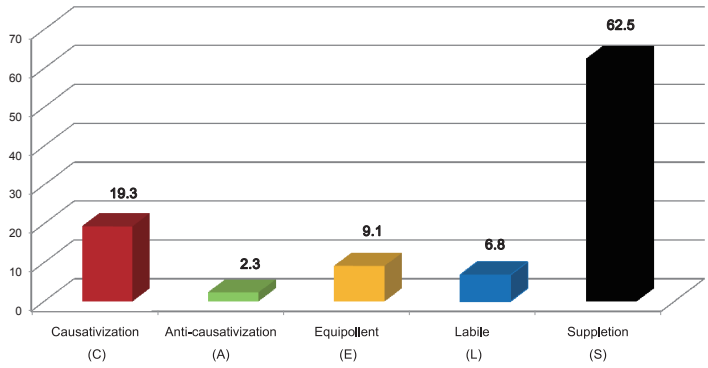


図7　諸言語における「死ぬ」と「殺す」の形式的な関係

今日初めて披露しますが、Haspelmathは二一言語でこのようなことを調べましたが、われわれは六〇言語で調べてみました。両方とも同じ実験をやっているので、Haspelmathの仮説が正しいのであれば、同じ結果がでてくるはずです。これは人文系ではあまりやりませんが、再現可能性を自分の眼で確認できるようなものをつくりました。これは『slopegraph』というものです（図10）。左はHaspelmathの二一言語

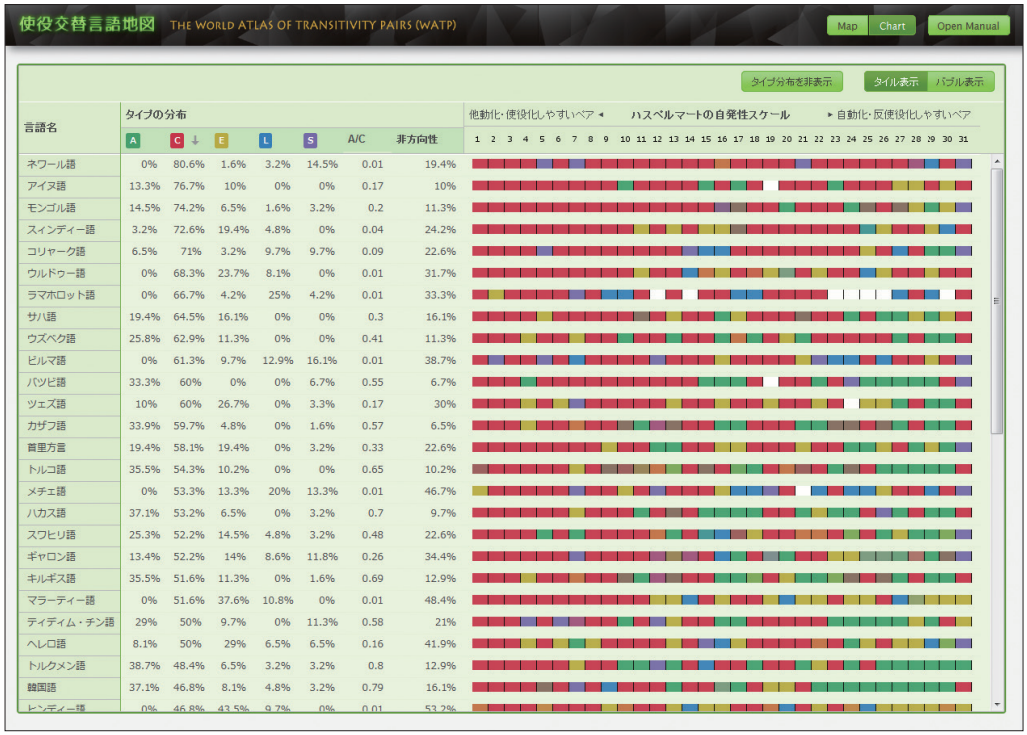


図8　個別言語の派生型の選好：使役型

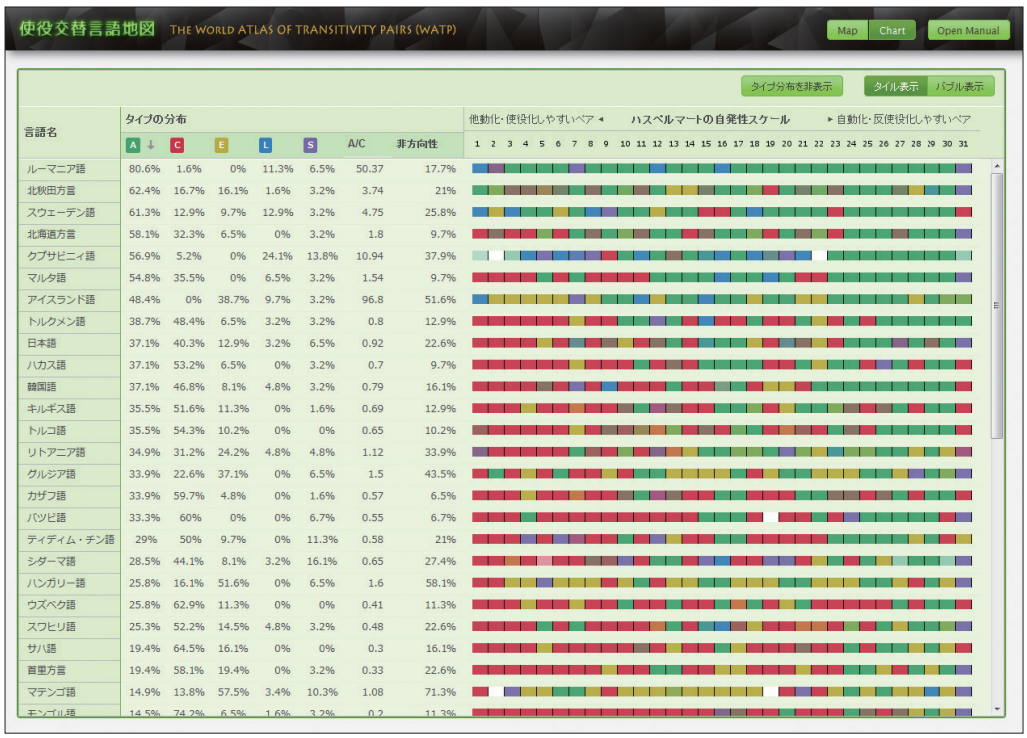


図9　個別言語の派生型の選好：反使役型

のデータ、右はわれわれが集めた六〇言語のデータです。この図からも見てとれますが、上のほうは順位の変更はありません。下のほうもわりと安定しています。ところが、真ん中のほうが順位が相当入れ替わることが確認できます。データベース化すると、普段は見えないような、順位の変動を眼で確認することができます。『slopegraph』はまだ公開していませんが、あと一か月後程度で公開します。

もう一つ、まだ公開していませんが、面白い機能があります。任意の二つの言語を選んで、それを比べてみます。日本語で、北秋田方言と首里方言を選びました。一方は北日本、もう一方は南日本。どんな違いがあるか、眼で確認することができます（図11）。左が首里方言、右が北秋田方言です。首里方言はほとんど「C」で、自動詞から他動詞が派生しています。北秋田方言にはAが多数でてきます。北と南でまったく違います。南のほうでは南アジアと同じように自動詞から他動詞が派生し、北のほうと違うことが、二つの言語を隣どうしに置いてみて初めてわかります。この機能もあと少しで公開しようと思っています。

これまでは、ある言語現象を、ある特定の言語で、同じような方法でたくさんのデータを集め、データベース化して比べ、地図のうえで見せ、こういう現象がありますと記述してきましたし、可視化してきました。しかしなぜ、ある特定の動詞で、自動詞のほうが短く、他動詞のほうが長いのか。逆に、ある特定の動詞は、なぜ自動詞のほうが長く、他動詞のほうが短いのかを説明しなければいけない。説明があって初めて、あ～なるほど、とわかるわけです。

このことについて優れた研究をしたのは、なんと、日本語を研究し

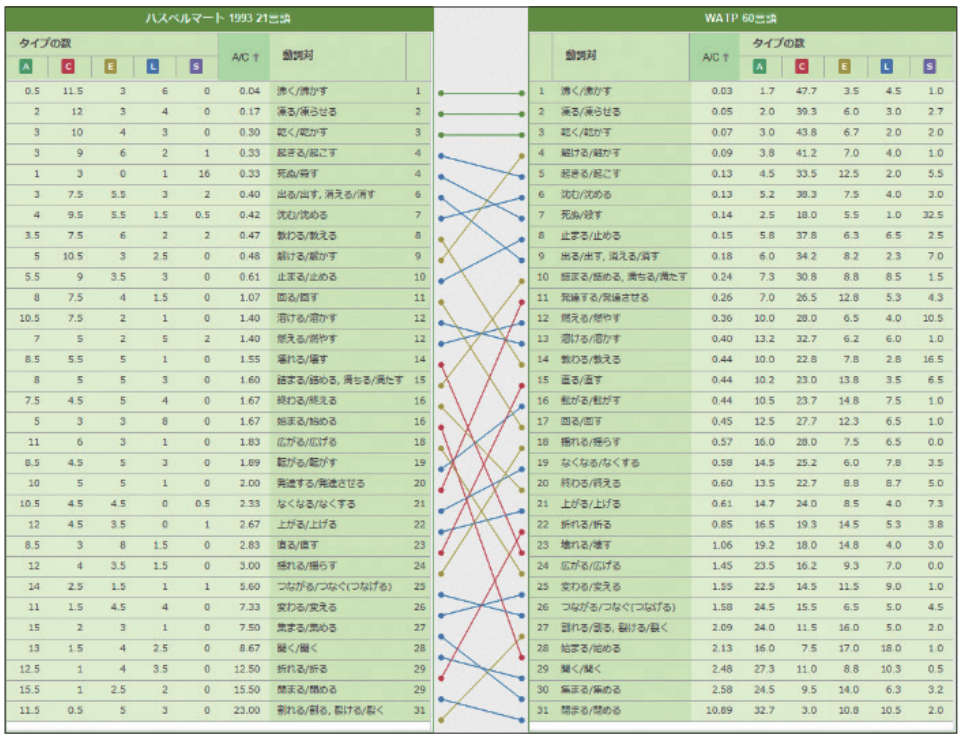


図10　新機能：slopegraph

ている日本生まれで日本語が非常に達者なアメリカ人のJacobsen先生です。Jacobsen先生は、以前私どもの研究所に客員研究員でおられたことがあります。この先生の説明では、「特定の変化を外的な力の有無と結びつけることが普通である。その結びつきは世界の経験、つまりその変化の最も典型的な起こり方に基づいている。ある種の変化は、通常、自発的に起きていると認識される……それに対して、ある種の変化は、通常、外的な力によってもたらされていると認識される……有標性理論は、経験における通常性が言語的通常性に反映されること、つまりよりシンプルな形式がより複雑な形式に比べて通常（無標）であることを予測する」と。

ID	Haspelmath (1993) Pair	Shuri Dialect Download			Kita Akita Dialect Download		
		Non-causative	Causative	Type	Non-causative	Causative	Type
1	boil	wak-	wakas-	C	waga(s-a)sar-u	wagas-u	A
2	freeze	kuhwa-	kuhwaras-	C	koor-as-ar-u	koor-a(ga)s-u	E
					kooras-ar-u	koor-ahe-ru	A
3	dry	kaarak-	kaarakas-	C	kawag-u	kawag-as-u	C
					kawag-as-ar-u	kawag-as-u	A
4	wake up	?uki-	?ukus-	C	ogi-ru	ogos-u	C
					ogi-rasar-u	ogos-u	A
5	go out/put out	caa-	caas-	C	de-ru	das-u	C
					das-asar-u	das-u	A
					tsie-ru (kie-ru)	kes-u	E
6	sink	sizim-	sizimi-	C	sizim-u	sizim-e-ru	C
					sizime-rasar-u	sizime-ru	A
					sizimasar-u	sizime-ru	A
7	learn/teach	nara-	naraas-	C	osowar-u	ohe-ru	A
8	melt	tuki-	tukas-	C	toge-ru	togas-u	C
					togas-asar-u	togas-u	A
9	stop	tuma-	tumi-	E	tom-ar-u	tom-e-ru	A
					tom-e-rasar-u	tom-e-ru	A
10	turn	maa-	maas-	C	maw-ar-u	maw-as-u	E
		migu-	miguras-	C	maw-ar-asar-u	maw-as-u	A
					maw-as-asar-u	maw-as-u	A
11	dissolve	tuki-	tukas-	C	tog-e-ru	tog-as-u	C
					tog-as-asar-u	tog-as-u	A

図11　新機能：comparison（二言語比較）

この先生は、英語のネイティブスピーカーで、日本語もほぼネイティブスピーカーで、両方の言語が非常によくわかっているため、このような研究ができたのだと思います。

ただ、「裂く」「裂ける」だと、道具を持って、なにかを「裂く」ことが基本です。物事が勝手に「裂く」ことはありません。ですから、なぜ「裂く」が短いのか。われわれが理解している道具を持って、なにかを「裂く」のが典型的ですので、その場合は他動詞が基本です。自動詞は派生されます。しかし、「沸く」「沸かす」はその逆です。自然界でも、日本は温泉がたくさんあるので、水が沸いたり、人間が火を焚いて沸かしたり。「火を焚いて沸かす」というのは複雑な意味ですので、言語のうえでも複雑になっています。これはアイコニック（類像的）な説明といいます。つまり、概念的に複雑なものは形のうえでも複雑に表します。概念的に単純なものは、形のうえでも短く表す。こういう概念と言語形式の単純さ・複雑さのあいだに写像関係があるのではないかとJacobsen先生は説明しています。



この先生の研究から示唆を得て、さきほどのHaspelmathは、言語の数を増やしているわけです。ですから、日本語の研究が出発点となって、世界の言語に大きく貢献している非常に面白い現象の一つだと思います。

所長から、ソトから見る日本語、ウチから見る日本語という話がありました。日本語からソトの言語を見ると、このような知見で世界の言語が分析できるという素晴らしい研究が日本語から始まったといえると思います。専門的に、これはdiagrammatic iconicityと呼ばれていますが、専門的な話はそこまでにします。

第四部　日本語の多義的自他動詞を学ぶ

私は日本語学習者で、過去三五年間、日本語を学んでいますけれど、一向に上達しません。なんでだろうかと思っています。私みたいに悩んでいる学習者が世界中にいます。

発表するときにいつもあがってしまいます。この「あがってしまう」の意味は、アドバンスな日本語です。「温度が上がる」のは、誰でも理解できます。発表するとき、「みんなの前であがってしまう」というのは、どの教科書でも教えているわけではありません。学習者がこれをどう勉強すればいいか、世界中の日本語学習者の大きな悩みのタネです。市販のどの国語辞書で「あがる」を調べてみても、ほとんどの辞書は日本人のためにつくっているものです。私が日本語の勉強を始めたとき、国語辞書を使って調べました。大変な作業でした。一行読んでも、何時間かけても読めない漢字がでてきて、それを漢和辞典を調べ、そこからこれは「湯桶読み」なのか「重箱読み」なのか、大変な問題がありました。まあ、マニアはそんなことを楽しくやりますので、長く勉強を続けることができるわけです。私みたいに。マニアでないと途中で挫折します。

教科書にでてこない、インドにいて周りで日本語が話されていない、ネイティブの先生がいないとき、どうやって勉強するのかという問題があります。基本動詞になればなるほど難しく、たくさんの意味があります。「あげる」という動詞は多義的で、意味はなんと二〇を越えます。



日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりを図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツール（辞典）

→http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/

図12　基本動詞ハンドブック

この意味を全部説明している教科書はありません。イメージとして、なんとか下にあるものを「上げる」という説明のものがほとんどです。

そこで、『基本動詞ハンドブック』を、いろいろな苦労をしてつくりました（図12）。このたくさんの意味がどうつながっているのか、日本語のネイティブスピーカーは頭のなかでわかっているので説明は不要ですが、外国人には説明しないといけないので、その説明をこのハンドブックではしています（図13）。紙の辞書だと印刷が大変なので短くしますが、われわれはインターネット上でやるので、スペースはいくらでもありますので、たくさんの文字数を使って、説明することができます。例文にはすべて音声をつけています。難しい意味は、アニメーションを使って説明しています。緊張して「あがる」は、三コマ漫画で説明しています。そのようなものをいま無料公開しています。この辞書をつくるために、日本人の正用と外国人の誤用の両方のコーパスを使って、客観的なデータに基づいて例文をつくることをやっております。前川先生から話があったBCCWJという一億語のコーパスを使っています。日本人の正用を調べるために、たとえば「○○があがる」、その「が」のところの前の名詞はどういう名詞なのかを、これで調べることができます。また、「冷える」と「冷める」はどう違うのかも、このコーパスを使って調べることができます。このようなさまざまなコーパスを使ったうえで見出しを執筆しています。執筆者もたくさんいます。文法的に正しくない文（非文）が普通の辞書にはでてきませんが、われわれの辞書では、正しい文とともに非文も載せていて、それはなぜ正しくないかを説明しています。たとえば「赤ちゃんがあがってしまった」とはいえない。なぜかというと、赤ちゃんにはそういう精神的な能力はない、ということを説明するわけです。なぜできないかも書かなければいけない。それがあって、初めて学習者は納得して「なるほどね」ということになるわけです。



2014年4月～一般公開　セッション数：21,725（2016年2月28日現在）
ページビュー数：38,176（2016年2月28日現在）

図13　多義的自他動詞の学習

結び

世界諸言語と比較・対照してこそ、日本語が世界の他の言語とどういうところが似ているか（類似点・普遍的）、または、どういうところが異なっているか（相違点・個別性・多様性）が見えてきます。理論研究の成果を、教育現場により積極的に還元する必要があると私は思っています。ありがとうございました。